明治学院歴史資料館
ニュースレター No.9

明治学院歴史資料館発行
2017年10月

目 次

・『和英語林集成』刊行150年に寄せて―編纂協力者について―
・明治学院大学Ｌ.Ｍ.Ｓ.――その設立と60年代の活動
・横浜校舎で『和英語林集成』展示とトークショー
・調査研究報告：日本初の盲人用教科書は、凸字本の「ヨハネ伝」
・2017年度上半期活動報告／寄贈資料紹介／新刊案内
・今年の夏、インブリー館は外壁修理工事を行いました。

『和英語林集成』刊行150年に寄せて ―編纂協力者について―

辞書を著すにあたり、近代から現代に向かっていく中で一人の偉業(もちろん、複数名で作成されたものも多数存在している)から次第に組織的な作成方法へとシフトしていく傾向にある。『和英語林集成』が刊行された150年前ころはいかなる状況であったのだろうか。

数例を挙げるに過ぎないが、多少先行する『英和対訳袖珍辞書』(1862)では複数の名が挙がる。国語辞書としては、大槻文彦による『言海』(1889-1891)の逸話はよく知られるところである。また、翻訳兵学書さらには新聞や布令などの難語の読解のために漢語辞書が生み出され、漢和辞書への流れにつながる。

そのような中で、J.C.ヘボン博士の日本人の協力者という点に関して、『和英語林集成』初版(1867)には、「申す」の用例に‘*Na wo Gin to*―, his name is called Gin.’と、岸田吟香の名が収録される。また、編纂の状況については上海への印刷にも同行した吟香による『呉淞日記』からも知ることができる。漢籍の素養のある吟香は内容面のみならず、和文タイトルの双鉤字(そうこうじ)、仮名対照表、カタカナ活字の母型をも作成している。それ以前にはヤゴロウ、矢野隆山などの助力をはじめ、施療などの日常生活での人々との関わりも忘れることはできない。

また、再版(1872)では奥野昌綱の名が挙がるのであるが、具体的な助力には不明な点が多い。最近、寄贈された資料からヘボン博士に眼科を学んだ大森隆碩が上海に同行しているが、ヘボン博士側の資料にはその名は挙がらないようである。ヘボン博士自身は書簡によると1871年11月初めころに上海に到着し1872年7月22日に日本に戻っている。すべて同道しているのか(隆碩は9月の帰国後、D.B.シモンズに医学を学ぶとしている)、現地でいかなる協力をなしたのか、ヘボン博士や『和英語林集成』という観点から今後の解明を行わねばならない。

3版(1886)では、『漢英対照いろは辞典』(1888)や『和漢雅俗いろは辞典』(1888-1889)を編んだ高橋五郎が知られる(3版の序に謝辞が載る)が、『日本風景論』(1894)で著名な志賀重昂(しげたか)が、丸善商社に勤めていた際に、校正を手伝ったと言われている。

かかわり方の多少によって表立たないケースもあるが、協力者そのものについて(先行研究も多数存在してはいるのだが)、ヘボン博士また『和英語林集成』を軸とした研究を行う余地が大きく残されている。『和英語林集成』の編纂に深くかかわるものであり、今後、ひとつひとつ紐解いていくことが求められている。

木村一(歴史資料館研究員・東洋大学文学部教授)

明治学院大学Ｌ.Ｍ.Ｓ.――その設立と60年代の活動

「Ｌ.Ｍ.Ｓ.」(Light Music Societyの略)は、いわゆるポピュラー音楽(軽音楽)を愛好する学生が参加している本学の課外サークルで、現在でも活発な活動が行われている。2014年4月17日(木)にＬ.Ｍ.Ｓ.の草創期の同窓生を歴史資料館にお招きし、当時の活動の様子を座談会形式で語っていただいた。

座談会当日の様子

当日は、木村禧太郎氏(1963年大商卒)、原曙美氏(1965年大社卒)、海老原靖也氏(1966年大経卒)、麻田浩氏(1967年大経卒)、重見康一氏(1967大経卒)、吉田順治氏(1967年大経卒)、麻生静子氏(1968年大社卒)と、7名のＬ.Ｍ.Ｓ.出身者が出席し、発起人である五嶋正道氏(1967年大商卒)が司会をつとめた。

3時間におよんだ座談会の話題は、多岐にわたった。Ｌ.Ｍ.Ｓ.は創設当初より、学生でありながら当時の音楽業界で活躍したという話は伝わっているが、その具体的な実態については、これまであまり語られてこなかった。今回は、その当時の様子が詳細に語られ、1960年代における本学学生の知られざる音楽活動が明らかとなった。この座談会の全容は、本歴史資料館の資料集に掲載を予定している。

Ｌ.Ｍ.Ｓ.の歴史は、1961年に木村氏が愛好会として立ち上げたことにはじまる。当初はハワイアンだけを演奏していたが、やがてカントリー＆ウェスタンとジャズを愛好する学生たちが加わり、Ｌ.Ｍ.Ｓ.初期の活動はこれら3ジャンルの音楽で構成された。さらに1963年には同好会に昇格し、規模も拡大していった。

ハワイアンでは、木村氏率いるバンド「ロイヤル・ハワイアンズ」が活躍し、その演奏水準の高さから業界内で注目された。そのメンバーには、のちに《霧にむせぶ夜》のヒット曲で知られる黒木

横浜校舎で『和英語林集成』展示とトークショー

図書館主催の『和英語林集成』150周年の展示が5月から6月にかけて横浜校舎で約3週間行われた。5月26日の「戸塚まつり」(地域と行う大学祭)では、歴史資料館から松岡良樹研究調査員がトークショーを2回行った。

大学図書館の所蔵する「幕末・明治英学辞書コレクション」から、江戸期の代表的な日本語字書「節用集」、幕府の作った最初の英和辞書、ペリーを派遣した米国大統領フィルモアのサイン入り『ウェブスター辞書』、本格的日本語辞書となった大槻文彦の『言海』や現代の国語辞典などが3ケースに多数並べられ、解説パネルも展示された。

ヘボン博士の『和英語林集成』は日本初の和英・英和辞書といわれ、明治を代表する英語辞書であるが、現代の英語学習用の和英辞書とは異なり、英語で書かれた日本語辞書(国語辞典)であり、いまも近代日本語辞書として参照されている。

トークショーは幅広い世代の方々が各回20名以上参加し、辞書に興味を持つ人の多さに驚かされた。なぜ日本の辞書には漢和辞典と国語(日本語)辞典があるのか、外国との出会いから日本語辞書が生まれた経緯、英学が国語辞書や日本語文法に及ぼした影響、なぜヘボン式ローマ字が普及したのかを説明すると、最後には拍手をもって終了することができた。

憲(明治大学)も大学の垣根を越えて参加していたという(木村氏はテレビ番組『夜のヒットスタジオ』で黒木憲と共演もした)。ジャズでは「ブルーマイナーズ」が活発な演奏活動を行い、その実力が信頼され、白金祭などで北村英治、白木秀雄、日野皓正といった当時一流のジャズ・ミュージシャンたちとの共演を果たした。

ブルーマイナーズのメンバー
blue minors recital パンフレット(1965)より

カントリー＆ウェスタンでは、のちに「ブレッド＆バター」としてデビューする岩沢幸矢氏が在籍していたほか、1963年にはＬ.Ｍ.Ｓ.の麻田、重見、吉田勝宣の三氏に、当時、日本大学の学生だったマイク眞木が合流し「モダン・フォーク・カルテット」が結成され、日本で最初に「学生フォーク」を開拓し、人気を博したという。そのほか、当時のＬ.Ｍ.Ｓ.は、黒澤久雄が率いた「ザ・ブロードサイド・フォー」や田代美代子らとも交流があった。

海老原氏は当時を振り返って「なにかを求めて音楽をやっていれば、それがなんか“良いこと”につながる、自分たちの夢が叶うみたいなことがあってね、あの頃は勉学以外に、そういうものを持っていた。また、それを実現してくれるようなことが本当に起こってくるんだよね。なんか一生懸命やっていれば、なにかが起こるんじゃないかと思えたんだ」と語ったが、この言葉こそが1960年代のＬ.Ｍ.Ｓ.の精神を代弁しているだろう。

加藤拓未(歴史資料館研究調査員)

後列左から 五嶋氏、吉田氏、海老原氏、麻田氏
前列左から 木村氏、麻生氏、原氏、重見氏

『和英語林集成』刊行150年企画展示
「日本語辞書の初めて―「和英語林集成」―」開催中

ヘボン博士の代名詞ともいわれる『和英語林集成』は1867年に初版が刊行されました。

歴史資料館ではヘボン博士編纂の『和英語林集成』刊行150年を記念し、パネル展示を開催中です。

それぞれの時代に使用された辞書や『和英語林集成』の解説、そして『和英語林集成』が後に生まれてくる辞書にどのような影響を与えたのかをパネルで紹介しております。また、ロンドンで出版された初版や縮約版など貴重な資料も併せてご覧いただけます。

展示資料

- 須原屋茂兵衛他『大全早引節用集』1817年
- 『和英語林集成』初版 ロンドン版 1867年
- 『和英語林集成』初版 縮約版 1887年
- 大槻文彦著『言海』1891年

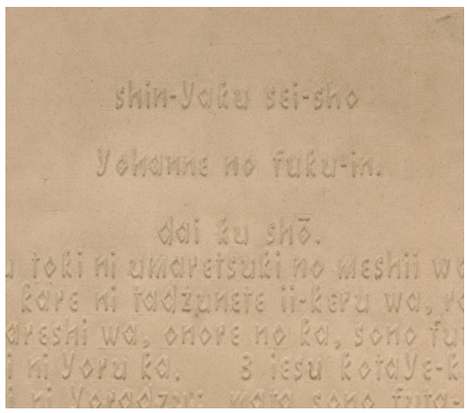
調査研究報告

■ 日本初の盲人用教科書は、凸字本の「ヨハネ伝」

明治学院の人々は聖書和訳の中で重要な役割を果たしましたが、盲人にも聖書を届けたことは、これまでほとんど知られていない。

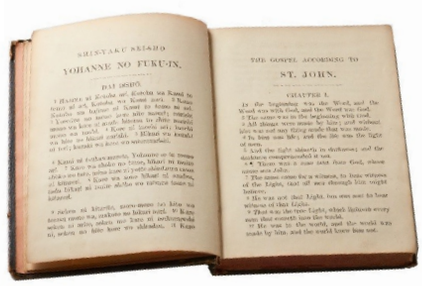
明治学院を作った教派の一つ、スコットランド一致長老教会の宣教医フォールズ博士が発足させた楽善会は、1875年に聖書の凸字本を刊行し、続く1880年には盲学校を設立した。明治時代の初期、白金移転前の東京築地時代のことである。

当時の識字教育は紙に文字を浮き出させてそれを触って読み取る「凸字」が世界標準の方式であり、米国はパーキンス盲学校のS.G.ハウ博士が開発したボストンタイプの活字が1835年全米盲教育者会議で認定され世界で最も進んでいた。



最初に作られた凸字本聖書
「新約聖書ヨハネの福音 第9章」

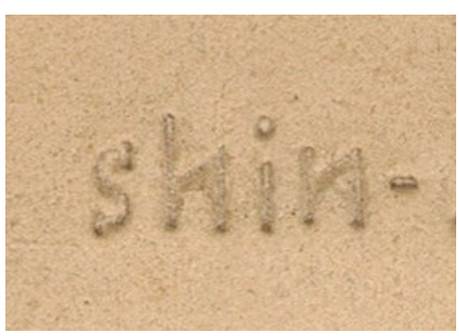
最初に作られた凸字本聖書は1875年12月「新約聖書ヨハネの福音第9章」であり、和訳された聖書をローマ字で表現し、米国聖書協会に発注し250部が製作された。底本は1873年にヘボン博士がニューヨークの米国聖書協会で発行した世界初の和訳ローマ字聖書“Shin-Yaku Sei-Sho. Yohanne no Fuku-in”である。これが日本最初の盲人用特殊教育教科書であり、文部省編『特殊教育百年史』にも登場する。またこの年は明治政府がキリスト教を黙認した年でもある。



底本である世界初のローマ字和訳聖書
J.C.ヘボン著「ヨハネの福音」

触って読みやすく工夫されたボストンタイプのアルファベット凸字が、やや厚めの洋紙にくっきりと浮き出し、ローマ字は分かち書きに組まれて読みやすく工夫されている。製法は活字を拾って組版し、その上にやや湿らせた紙を置きフェルトを載せてエッチング機などで圧をかけ、仕上げにヘラ等で圧が充分でない細かい部分(例；D、Oなど)をしっかりと押して凸字を形作っているように見える。

和訳凸字本聖書のローマ字版は、他に「ルカ伝福音書」も存在するが、楽善会はカタカナ凸字本「マルコ伝福音書」を製作し、さらにそれまでの日本語にはなかった「分かち書き」も研究しながら「ヨハネ伝福音書」も製作している。これはヘボン博士に学んだ大森隆碩の開校した上越市(越後高田)の旧高田盲学校所蔵資料として共に所蔵されている。



使用された凸字のアップ

その後、楽善会訓盲院の後進、東京盲唖学校が1890年に石川倉次翻案の点字を採用し、凸字本の時代が終わる。凸字本聖書は約15年間の短い期間とはいえ、盲人教育に近代的な考えと手法を持ち込んだといえよう。聖書が全訳される前から盲人の教育に目を向け、漢文ではなく、話し言葉で訳された聖書を使って盲人教育をしようとしたその志の高さを私たちは記憶したい。

この最初の凸字本聖書はフォールズ博士たちが創設した楽善会訓盲院から発展した、現在の筑波大学附属視覚特別支援学校(旧筑波盲学校)の資料室で所蔵されている。このたび歴史資料館は同校の特別の協力を得て、デジタル画像技術と伝統的な金箔押し技法を使い、その復元レプリカを製作することができた。高田盲学校のカタカナ凸字本聖書のデジタル化も終え、今後は残された京都府立盲学校に所蔵されている「マタイ伝福音書」や「山上の垂訓」などの凸字本も調査していきたいと考えている。

松岡良樹(歴史資料館研究調査員)

2017年度 上半期活動報告

4月　明治学院高等学校・明治学院大学入学式（4月1日、3日、7日）

明治学院新人職員研修協力（4月13日）

明治学院高等学校新1年生フィールドワーク協力（4月18日～28日）

展示してある様々なテーマから、自分が感銘を受けたテーマを選ぶ課題を実施協力

明治学院歴史資料館ニュースレターNo.8刊行

歴史資料館展示室 賀川豊彦コーナー一部展示替え

資料寄贈者来館対応　2件

臨時開館（明治学院大学入学式 4月1日）

5月　戸塚まつり　図書館主催トークショー協力(5月26日)(詳細：P.2)

6月　『和英語林集成』刊行150年企画展示 開催（関連ページ：P.3）

全国大学史資料協議会東日本部会2017年度総会出席（於：淑徳大学)(6月8日)

キリスト教学校中高校長会 歴史的建造物の見学・説明(6月22日)

第1回 歴史資料館委員会開催（6月28日）

臨時開館（キリスト教学校教育同盟加盟校高校教員説明会・大学保証人総会 6月3日）

7月　文学部芸術学科授業協力（7月3日）

昨年に引き続き「視聴覚教育メディア論Ａ」担当三河内彰子先生の学芸員課程授業の協力

歴史的建造物の見学と説明、関連資料をもとに、展示室見学とその開設経緯を説明

第4回 立正大学史料編纂室主催講習会「地方自治体における市史編纂と資料の保存・公開」参加
（於：立正大学)(7月7日)

2017年度第一回ACUCA日本委員会　歴史的建造物の見学・説明（7月19日）

全国歴史教育研究協議会東京大会 史跡見学会 歴史的建造物の見学・説明（7月28日）

地下倉庫所蔵資料目録整備作業

インブリー館外壁修理工事に伴い、事務室移転（7月31日～9月15日）

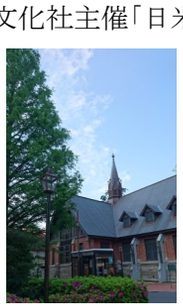
8月　地下倉庫所蔵資料目録整備作業

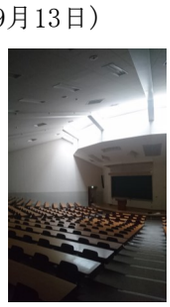
大学白金校舎オープンキャンパス展示パネル貸出

臨時開館（白金校舎オープンキャンパス 8月26日、27日）来館者920名

9月　明治学院中学1年生 白金キャンパス見学（9月12日）

出版文化社主催「日米アーカイブセミナー」参加（9月13日）





【上半期 統計】

資料提供・レファレンス件数　49件

展示室総来館者数(概算)　2,916人

※7月21日～9月20日：
展示室閉館・レファレンス休止

寄贈資料紹介

今年の上半期にご寄贈いただいた資料を一部ご紹介いたします。

■奥野昌綱直筆の掛け軸

奥野昌綱は明治学院初代総理J.C.ヘボンの日本語教師であり、『和英語林集成』の編纂や聖書翻訳にも尽力した日本人最初のプロテスタントの牧師である。

奥野の祖父が有名な書家であったこともあり、書についても大変造詣が深い。揮毫もよく頼まれた。この書は奥野と深い縁がある黒田惟信(これのぶ)牧師の御令孫である海野涼子氏からご寄贈いただいたものである。

黒田牧師は牛込一致教会にて奥野より洗礼を受けた後、1890年に明治学院神学部に入学し、1893年に卒業した。その後、陸軍軍人伝道に従事した。奥野の略伝を執筆したのは黒田牧師である。

左から
松原学長、海野氏、島田氏(1961年 大社卒)
島田氏には今回の寄贈にご尽力いただいた。

寄贈者の海野氏は、現在「マザー・オブ・ヨコスカ顕彰会」の代表を務められている。この顕彰会は、黒田牧師と共に軍人伝道に勤しんだ宣教師エステラ・フィンチ(日本帰化名：星田光代)の功績を偲んで設立された。

参考資料：黒田惟信編『奥野昌綱先生略伝並歌集』(一粒社、1935年)

■富永兵彌関連資料

富永兵彌は明治学院普通学部を1891年に卒業した。島崎藤村と親交が深く、共に台町教会(今の高輪教会)にて木村熊二より洗礼を受けた。

今回、御曾孫にあたる富永一則様、小林登志子様より『讃美歌』など7冊と当時の貴重な写真を8点ご寄贈いただいた。

中でも特筆すべきは、グリーンの『英国国民史』(1889年版)(左から3冊目)、スティールの『衛生学』(1874年版)(左から2冊目)、マコシュの『心理学』(左から4冊目)である。これらは白金通信1980年2月1日 134号にて当時学院で使用された教科書であると紹介された。

今回ご寄贈いただいた『讃美歌』と当時の教科書

寄贈資料の一部をご紹介いたします。ご寄贈いただきました方々へ深く感謝申し上げます。

■秋元　直茂 様　『訓點 舊約全書　上・下編』

■生島美紀子 様　大澤壽人関連資料・『天才作曲家 大澤壽人』

■川久保幹男 様　『札幌農学校』コピー

■棚田　守彦 様　ヘボン博士・奥野武之助の墓(ローズデール墓地)写真

■樋口　隆一 様　『ARNOLD SCHOENBERG 1874-1951,
ARNOLD SCHOENBERG 1874-1951 Japanese Version』

■宮城　玲子 様　熊本洋学校・ジェーンズ関連資料・
『ジェーンズが遺したもの』

■学院長室より　チャペルコンサートシリーズ
フライヤー・パンフレット類

■他大学・学校・資料館・博物館より　資料集・ニュースレター・年史類

寄贈のお願い

明治学院歴史資料館では
本学院の歴史に関する資料を
収集しております。
皆様のお手元に資料や
情報がございましたら
ご連絡ください。
宜しくお願いいたします。

新刊案内

文芸春秋
2017年4月刊行

『金谷カテッジイン物語 日光金谷ホテル誕生秘話』

申橋弘之 著

日光金谷ホテルは、西洋式リゾートホテルの発祥である。日光山輪王寺の楽人 金谷善一郎は、外国人であることを厭われ宿泊先がなく困っていたヘボン博士を自宅に泊め、博士の助言を受けて、前身の金谷カテッジインを開業した。この本では創業者 金谷善一郎、ヘボン、イザベラ・バードそして金谷カテッジインの発展と時代背景について触れている。

同ホテルについては常盤新平著『森と湖の館　日光金谷ホテルの百二十年』(潮出版社、1998年)があるが、本書ではヘボン博士の日光訪問についての新しい事実が記されている。それは奥野昌綱である。

ヘボン博士の日本語教師として、最初の四福音書の翻訳や『和英語林集成』の編纂にかかわるが、維新前の職は日光山輪王寺の納戸役であった。ヘボン博士が宿泊の準備もなく突然日光を訪れるとは考え難く疑問であったが、今回、奥野と金谷善一郎やその親戚との関係が詳述される。

ヘボン博士の泊まった東照宮近くの宿は、現在「金谷ホテル歴史館」として保存されて公開され、日光金谷ホテルにはヘボンと明治学院のパネルも展示されている。

松岡良樹(歴史資料館研究調査員)

教文館
2017年3月刊行

『戦時下のキリスト教主義学校』

榑松かほる/辻直人ほか著

『戦時下のキリスト教主義学校』(教文館、2017年3月)は、科学研究費共同研究(研究代表：榑松かほる元桜美林大学教授)の成果として6名で執筆された。各章で立教女学院、同志社高等女学部、関東学院、崇貞学園の事例を取り上げている他、第5章「興亜教育とキリスト教主義学校」では、1940年4月に始まった明治学院高等学部東亜科の設立経緯と運用実態を中心に考察しているので、以下この章を特に紹介したい。

1935年12月に起きた「ラマート事件」(宣教師ラマートが不敬罪容疑で取り調べを受けた事件)以降キリスト教学校は国家政策への同調を強めていく。明治学院は1939年9月に文部省官僚経験者の矢野貫城を学院長として迎え、新たに大東亜共栄圏を支える人物を育てるための東亜科を開設した。その後も興亜教育を標榜した学科や課程が、関西学院などその他のキリスト教学校にも作られた。興亜教育は、宣教師ら欧米人の学校教育からの排除と一体で行われた。1930年代までは自由な雰囲気を維持していたキリスト教学校が40年代に興亜教育を推進したのは、東アジアの支配圏拡大を目指した国策に従った結果であった。

本書全編に渡り、キリスト教学校の国家統制への対応を多角的に明らかにしている。是非ご一読いただきたい。

辻直人(歴史資料館研究員・北陸学院大学人間総合学部教授)

今年の夏、インブリー館は外壁修理工事を行いました。

インブリー館は1998年に国の重要文化財に指定された都内でも数少ない旧宣教師館です。これまでにも様々なエピソードがありますが、国の文化財指定を受けた後についてはあまり語られてません。

そこで、今回は文化財の保存管理の観点から管財部管財課の永尾主任、野村氏に5つの設問に回答いただきました。

保存修理工事前のインブリー館

設問1. インブリー館の工事履歴について

外壁については2005、2012、2017年に保存修理を目的とした工事を実施しました。外部の小修繕として、ベランダ土台(2009、2011年)、手摺(2011、2016年)、軒樋(2014年)等の腐食部補修工事を行っています。

また、内部についても建具の調整などを随時実施。比較的大きな工事としては、2011年に東日本大震災の被害を受けた壁や天井の亀裂補修、照明のシェードの交換等を行いました。

設問2. 今回行った外壁塗装工事の実施内容

今回は、外壁塗装仕上げの劣化部補修、木材劣化部分の象嵌補修(バルコニー手摺や窓台等の腐食部分の埋木・剥ぎ木補修)、木製建具の建付けおよび窓の分銅の調整等を行いました。

外壁塗装工事最中の様子
左側の窓枠はグレーの下塗り、
中央の窓枠はこげ茶色の上塗り

設問3. 外壁塗装に使用している塗料について

保存修理工事の際は文化庁の「同材料・同工法に拠る補修・復原」の原則に則り、当初の仕様に相当する材料を採用する方針から、外壁・窓枠等に油性調合ペイント白亜鉛Ｂ種が用いられました。

その後、2005年頃から同材料は国内需要が減ったことから、国内生産がほとんど行われなくなった状況があり、入手が困難となったことを受け、2012年の改修工事以降では関係各所と協議の上、油性調合ペイントに最も性状が近いとされる合成樹脂調合ペイントを採用しています。

設問4. 文化財として保存と同時に利用しようと考えたのはなぜか。

文化庁は文化財の「建造物を有効に使い続けることは、保存の意欲を高め、継続的な維持管理の前提」と考えており、学院としても保存修理工事の際に「同窓会事務局として活用するための機能を備える」を基本方針の中に挙げています。

また、「3つの歴史的建造物が群となって明治学院を象徴する景観であり、文化財として保存されると同時に**生きた建築**として考えられ、修復される。」(「明治学院旧宣教師館(インブリー館)保存修理工事報告書」より)との考え方に基づき、文化財の維持管理に取り組んでいます。

保存修理工事後のインブリー館

設問5. 文化財管理をするうえで、一番大変と感じるところ

積極的に事務室等で活用しているため、執務環境として求められる機能の確保と文化財建造物の保存に影響を及ぼすと見なされる環境改善要望とのバランス調整が難しいと考えています。

下記の日程でインブリー館の一般公開を行います。この期間のみ内部の見学ができます。外壁補修が行われたインブリー館を是非ご覧ください。

2017年11月1日(水)～3日(金・祝)　10：30～16：00(入館15：30まで)

※事前申し込み不要・入館無料
※文化財につき館内にエレベーターはございません。予めご注意願います。

明治学院歴史資料館
ニュースレターNo.9

発行者　明治学院 歴史資料館
発行日　2017年10月1日

電　話　03-5421-5170
〒108-8636
東京都港区白金台1-2-37
E-mail
shiryokan@mguad.meijigakuin.ac.jp
ホームページ
http://shiryokan.meijigakuin.jp/

2017年度　歴史資料館委員・スタッフ

【明治学院歴史資料館委員会】

委員長　播本　秀史・歴史資料館館長(文学部教授)
委　員　秋月　望・図書館長(国際学部教授)
佐藤　公　(心理学部准教授)
秋山 智一郎 (法人事務局長)
岡村　淑美　(明治学院高等学校教諭)
植木　献 (教養教育センター准教授)
鈴木 直子(図書館資料管理課長)
青野 由美(明治学院東村山高等学校教諭)

【歴史資料館】

研　究　員　鈴木　範久　辻　直人　木村　一
研究調査員　松岡　良樹　齋藤 元子　加藤 拓未
事　務　局　桑折 美智代　**事務スタッフ**　松原 友紀子　岡安 圭子